

家庭科の男女共修をすすめる会

会報

'79 秋

連絡先

東京都渋谷区代々木2-21-11
婦選会館内

▽151

発行 一九七九年九月一日

共学のいっそうの広がり

佐藤 慶子

実りの秋を迎えて、それぞれに心に秘めた課題にどう取り組むか思いをめぐらしておられることと思います。

来年は婦人の十年の中間会議の年でもあり、全国に共学を広げたいものです。

私も高校の共学家庭科に招かれて四年目を迎えました。子どもたちに生活についての視点を開かせてやりたいとの思いで多忙をかえりみず非常勤講師を続けてまいりました。

彼らは調べ、知り、議論し、調理し、また考え、悩み、それらを糧に飛び去って行きました。

私どものささやかな示唆が人間らしい生活文化を築く手がかりになってくれることを期待しています。この教育の手ごたえをひとりでも多くの先生にお持ちいただきたいものと願っています。

授業参観のおさそい

◇東京都立農産高校の共学家庭科の授業を参観し、授業のあとで話し会いましょう。

◇九月一八日(火) 午前一〇時正門前集合

(午後だけ参観される方は一二時半)

◇ご希望の方は家政教育社の半田、馬場あてにお申しこみください。(詳細別紙)

もくじ

共学のいっそうの広がり	1
授業参観のおさそい	1
七・七集会報告・講演要旨	2
小学生と家庭科	3
集会の感想	3
文部省との話し合い	6
自治体への働きかけ・自治体の動き	7
(新知事へのアンケート、都知事へ質問、山口県へ意見書、山形県の行動計画、埼玉県、神奈川県、世田谷区の状況)	9
京都府立高校でのアンケート調査	9
男女共修生活科をすすめる会がスタートしました(名古屋)	10
教科書会社に申し入れ	11
高校学習指導要領解説について	12
すこしよくなった小学校教科書	13
いろいろな集会から	14
(はたらく婦人の中央集会、母親大会、家教連夏季集会)	15
世話人会報告	15
自民党の家庭基盤充実対策	16
総理府では	16
アンケートにご協力ください	16
次の集会について	16

七・七 集会報告

国際児童年に因んで子どもの立場から家庭科について考えることにしました。

中嶋里美さんの経過報告、半田たつ子さんの小学生へのアンケートの報告に引き続き、日本子どもを守る会理事山口勇子さんにお話していただきました。

(司会 馬場洋子・和田典子 記録 嶋田道子)

山口さんのお話

「子どもの人権と家庭科教育」

(要旨)

わたしはずっと日本子どもをまもる会の仕事をしてきました。まもる会といういかにも弱者の保護のように聞こえますが、そうではなくて子どもの権利をまもるということです。

家庭科の共修についてはこれまであまり知識はなかったのですが、このたびいろいろ送って貰った資料をみて、これなら自分の考えと同じだと思い講演を引きうけたわけです。わたし達の頃は良妻賢母主義の家庭科でわたしは裁縫などいつも劣等生でした。

さて、子ども達の権利がどれ程おかれているか——3月8日婦人デーに青森県のむつ市に行ったのですが、漁村が政府から開発資金を受けとったときどうなるか——一村をあげて漁業から足を洗い、まず家を建てる、そこにシャンドリヤやソファを入れる……。しかしその中でどんな生活が営まれているかと云えばお母さんは完全に嫁として扱われ、おじいさんには一言半句も逆えない毎日。そんな中で子どもは小学一年の時から非行がはじまっています。

日本全体としてみれば放射能の不安、公害の複合汚染——子どもは人間と生まれる権利さえ危険にさらされています。

子どもの文化の面ではどうでしょうか。

子どもから五感が失われている。舌の味わいのない子が生まれてきました。にせもの食品、合成食品にならされて本ものの味を好まない子がふえてきました。

だってそうでしょう、朝の六時からテレビのコマーシャルでこうした食品の宣伝をしているのですから。調査してみましたら、ある

カレーのコマーシャルは一日に四〇数本も流されていました。テレビばかりを一方的に受け取っていた子は自分から信号を発することをしてしないで自閉症児となり登校拒否になるのは当然です。

こうした状況の中で人間らしさを追求する家庭科は大事な観点を提供しているといえるでしょう。人間の基盤は家庭にあり、社会の中核は家庭にあります。

先日、南京大虐殺を取材したルポライターから聞いたのですが、時の文相は「あゝ、したことは家庭教育に責任がある」と云ったそうです。今年の3月ですか、参院議員の市川房枝さんが現在の文相に同じような質問をしたところ同じ答えをしていました。

当時は富国強兵を第一義に教育がなされたわけですが、この教育は今度の戦争で見事に破産したわけであり、人間の立場からの教育が必要です。

家庭科の共修をすすめるのは一つの運動であり、私どもの子どもをまもる会もそうです。この会は親子映画をみる会とか親子劇場とかいくつも分かれていきました。多様化していくのだから当然でしょう。しかしそれらがしつかり横につながらなければ、連帯しなければならぬというのが私の考えです。

「小学生と家庭科」アンケート調査まとまる

半田たつ子

国際児童年にちなみ、小学生と家庭科、小学生と性別役割分担意識、父と子の家事分担の実態を知るために行ったアンケート調査の結果がまとまりました。

調査対象は、東京都、浦和市、草加市、岡崎市、岐阜県、津市、福井市、広島市、高松市の小学校六年生。男子三〇四人、女子二八四人、計五八八人です。まず、世話人の八島さんがプレテストを行い、その結果を検討して13の問いを用意しました。調査を快諾して下さった八氏と八島さんの担当クラスで、五月に実施。首都圏に住む世話人が集計しました。

当初の目的は、小学生の性別役割分担意識に、父親の家事参加や母親の職業の有無がどうかかわっているか、家庭科がもしろくで役に立つと答えた子供が中・高校でも学習したいという意欲を持っているか、などクロス集計によって明らかにしたいと願っていました。しかし、七月七日の集会で報告するには

集会のあと、男性の参加者から次のような感想をいただきました。

古い教育を受けた山口勇子氏の御講演は、戦後生まれの私にとってはあまり身近に感じませんが、お話の中で「何かの折に教え込まれた八言葉」がいつい出て来てしまう、それは（学校）教育の成果だろう」とおっしゃ

時間的に無理でしたので、今回は単純集計でアウトラインをつかむこととし、今後さらに調査を活用して、様々な関連を見出したいと思っています。ご協力下さった九校の子供たち、小林芳子、榎本稲子、和田美奈子、竹中敏子、吉沢昭子、清水千恵子、穴戸淳子、佐藤一子の各先生方に厚く御礼申し上げます。

調査結果

調査対象の子供たちの家庭環境は、父親の六割が勤め人、自営は三割、農業・漁業が四割。母親の職業は、子供の性別により、左のような違いが見られました（なぜかしら男の子の母親に専業主婦が多いのです）。

	専業主婦	勤め人	店や内職	農・漁業
男子	三三・二	三六・二	二五・六	一・六
女子	二二・二	四〇・一	三〇・九	〇・六

いました。人間の成長に影響を及ぼすことが大きい教育がやはり大切なんだナ——とつくづく思います。それと、「人間というものを育てる基礎が家庭（科）と思う」と述べていたように（本当にそうですね、女だけが人間性を持ち男が非人間的であっていいはずはない、男も女も共に学ぶべき教科でなければならぬと、よりいっそう思いました）。

△家庭科観▽

(表1・2・3)

(1)家庭科は「おもしろい」「役に立つ」と答えた子供たちが断然多いのです。いずれも女子のほうが男子より多く、「役に立つ」が「おもしろい」よりいっそう多いのです。役に立つという女の子は実に九五・八割です。

(2)「おもしろい」も「役に立つ」もトップは調理、続いてさいほう。男女共に六割の子が「全部役に立つ」と答えています。身体や手を使って何かを作るといふ喜びを、遊びの中で十分味わってこなかった子たちが、気の毒でもあり、又家庭科が子供たちの全面発達のために果たしている役割の重さを感じます。

(3)おもしろくない三冠王は、さいほう(男二七・六、女一五・一)、先生のお話(男五・六、女一一・三)、テスト(男一〇・二、女九・五)です。「おもしろくないものはない」

ときっぱり答えた子が男七・九、女一四・〇
いました。

(4) 中学・高校に行ってから、家庭科を習
いたい男子は約三〇％。「習いたい」ものが
「習いたくない」者を上回り、四七％が「わ
からない」と答えています。これは家庭科は
おもしろくて役に立つのだが、後述するよう
に彼らは既に性別役割分担意識に染められて
いるため、男の子の意識が引き裂かれている
と見る事ができましよう。

△性別役割分担意識▽ (表4)

子供が答えやすいように、男の人が食事作
りをするかをどう思うか、赤ちゃんの世話
(ミルクを飲ませたり、おむつをかえたりす
ること)をどう思うか、という尋ね方をしま
した。その結果、食事作りについては抵抗が
少なくなったが、赤ちゃんの世話は、まだま
だ女のものという意識が強いことがわかりま
した。この答えには各々理由を書いてもらい
ました。傑作を紹介します。

1. 食事作りー男もやった方がよい

男子「男の方がうまい」「味の見分けが
よい」

女子「男がやるとかっこいい(育児は逆
だという)」「男も苦しめなければソン」
「昔の男はえらかったが今は違う」

○男はやらなくてよい
男子「男は仕事がある」
女子「男の人がやると、なんだか男が弱
くなったみたい」

2. 赤ちゃんの世話ー男もやった方がよい
男子「男も親だから」「ぼくはそういう
の好きだし、かわいいから」
女子「子供は二人の子だから」

○男はやらなくてよい
男子「みっともないし、女の人がい
ないかと思われ」「男はほかに女にでき
ない仕事をやっている」

女子「男には信用がない、無器用だと思
う」「男の人のすることは会社の仕事ぐ
らいでいいから」「そんなこと女がする
ものだ」

△父と子の家事分担の実態▽ (表5・6)

「あなたのおとうさんと、あなたは、どん
な家事を、どの程度分担しているか」尋ねて
みました。その結果、父親が一番よくやって
いるのは子供の世話、一番やらないのはせん
たくでした。小学生は男女で大変開きがあり
ます。男の子で弟妹の世話、買物、食事の後
片づけをするのは一割強ですが、女の子は、
せんたくを除き、よくやっています。食事の
後片づけをいつもする子が男より、食事の支

度、掃除など、 $\frac{1}{4}$ から $\frac{1}{2}$ の子がいつもしてい
ます。男女差がないのは買物でした。せんた
くは、洗濯機でまとめて洗ってしまうので、
分担しにくいのでしょうか。

「いつもする」が二つ以上の人、「しない」
が三つ以上の人を拾い上げると、女の子がよ
く分担するので、女の子の父は男の子の父よ
りもサボっていることが明確に現れました。
親は、男の子と女の子で家事分担のさせ方を
違えている上に、娘がやっているのをよいこ
とにして、父親があぐらをかいているのです。
最後に、家庭科について自由に書かせた中
から、男の子のなまの声を聞き下さい。

●家庭科は高校入試に関係がないのでやら
ないほうがよい。女はいいが、男の気持ちに
なって考えて下さい(家庭科はおもしろくな
い、役に立たない、中・高校でしたくない、
父は家事を全くしない会社社長のムスコ)。

●洗濯や料理など、自分でやらなければな
ないとだめになる時がある。家庭科で正しい
やり方を覚えられのとてもよい。さいほ
うなど一つ一つのものができた時の満足感がとて
も気持ちがよい。どうせなら、一週間四時間ぐ
らいあるととってもよい。男女を平等にできる
のでいい(おもしろい、役に立つ、中・高校
でも習いたいという男の子。母はつとめてい

表1.

家庭科はおもしろいか			
	おもしろい	おもしろくない	どちらとも いえない
男	50.7	9.2	39.1
女	78.5	2.5	19.0
家庭科は役に立つか			
	役に立つ	役に立たない	どちらとも いえない
男	80.6	2.3	14.5
女	95.8	0.7	2.8

る。父は会社員で食事の支度以外の家事を時
々やるという家庭環境)。
●家庭科は、高校みたいに男はやらないで
いい(おもしろくない、習いたくない、食事
作り、赤ちゃんの世話は女のする仕事、大人
の男がするのを見たことがない子。父親は、
子供の世話を時々する以外何もやらない)。
女の子の場合は、おもしろくて役に立つて
中・高校で習いたい子も、父が家事をする場
合、性別役割分担意識から自由ですが、父が
全然しない場合は、逆に「これこそ女のつと
め」「男の人のすることは、会社の仕事ぐら
いでいい」と答えています。
親のあり方は見事に子供の意識に反映して
います。骨は折れるけれど、意図的な教育で
これを正していかななくては……。

表2.

	調理	さいほう※	ミシン	手芸	せんたく	すまい	その他
おもしろい のはどんな こと	男 76.9 女 82.9	男 31.5 女 52.4	男 14.1 女 15.4	男 3.2 女 6.6	男 2.9 女 1.7	男 5.5 女 4.2	
役に立つの はどんなこ と	男 53.9 女 60.2	男 29.3 女 59.1	男 6.6 女 10.6	男 - 女 -	男 9.5 女 9.2	男 1.6 女 1.9	全部 5.9 6.3

※さいほうにはミシンも含む

表3.

中学・高校に行ってから 家庭科を			
	習いたい	習いたくない	わからない
男	29.9	22.0	47.0
女	73.9	6.6	18.6

表4.

	男の人が食事を作る ことをどう思うか	男の人が赤ちゃんの 世話をどう思うか
男	29.0	9.6
女	34.2	22.9
男	51.5	40.1
女	48.6	40.5
男	8.3	38.6
女	10.6	25.4
男	10.0	13.9
女	6.7	11.2

表6.

	いつもする 2つ以上	全然しない 3つ以上
父	6.9	32.6
本人	10.5	27.9
父	2.8	59.5
本人	31.3	6.7

表5.

◎いつもする ○時々する ×しない 小数点以下4捨5入

		そうじ			せんたく			子供(弟妹) のせわ			買物			食事の したく			食事の 後片づけ		
		◎	○	×	◎	○	×	◎	○	×	◎	○	×	◎	○	×	◎	○	×
父	男	6	44	53	3	14	81	19	51	26	5	53	39	3	36	59	4	29	65
	女	8	50	40	2	15	80	20	55	22	4	55	22	3	41	50	4	33	61
本人	男	10	74	16	3	30	67	14	33	42	13	79	7	8	47	38	13	36	41
	女	22	75	4	7	64	28	24	30	33	15	80	4	25	60	15	33	56	13

文部省との話し合い

教科書検定、行政指導

について要望

馬場 洋子

七月十七日、すすめる会の世話人四名とちよど東京に滞在中の福岡の会員高木葉子氏とで、参議院議員会館の市川房枝議員を訪れ、文部省の教科書検定課長補佐の菊地氏と婦人教育課長志熊氏との話し合いをもった。

会では、昨年十一月に新指導要領に基づく新教科書の検定に際し「従来の男女の役割分担意識を助長するような記述をしてはならない旨を明記してもらいたい」と要望していたが、来春でそろそろ高校の「家庭一般」新教科書について再度要望した。

菊地氏は「新指導要領のもとでの教科書検定であり、民間の創意工夫を重視し、それにまちがいや不足箇所をチェックするだけで、来年度の検定で教科書会社がどういう工夫をしてくるか期待している」、又、七月十二日告示の新高校教科書検定基準は、その中で特に記述していないが、「指導要領が国内行動計画に基づく限り（指導要領は国内行動計画の

後に出されている）国内行動計画をふまえている」と語った。

男女のあり方の記述に対し、菊地氏は今年度の小学校の家庭科の教科書では、おそうじをしたり、子供をあやしているお父さんの姿が口絵に登場したり、中学の社会の「家族生活の問題」で「家族の人々が、これまでの性別分担をこえて、家事を分担しあうようになっている」など、その変わりようを示した。これらを一応評価するものの、それ以外の家庭科教科書の中で、なお男女の役割分担意識を助長する記述があることを指摘し、一層、適正な検定を要望した。

検定は、九〇人九部会からなる審議会が責任を持ち、可否を下す。その審議の参考資料を提供するのが、文部省側では四三人の教科調査官、民間では現場の先生、大学の先生からなる調査員制度（一点につき三名の意見を聞く）——第九部会（家庭・職業）の家庭科小委員会委員・亀高正夫（共立女子大教授）、斉藤道香（学習院大学名誉教授）、刀弥館尚子（都立教育研究所主任指導主事）、吉田久（東京医科歯科大学長）。

又、五十六年の実施まで技術・家庭科の相互乗り入れを禁じる行政指導が各地で出されているがやめてもらいたいと要望した。

自治体への働きかけ・自治体の動き

新知事への

アンケート結果

新知事（青森、岩手、秋田、山梨、大阪、大分、佐賀）に性別役割分担意識の解消、家庭科の男女共修をはじめとして、男女平等教育をすすめるつもりがあるかを質問したアンケートを送りましたが、青森県知事の北村正哉氏、秋田県知事の佐々木喜久治氏、山梨県知事の望月幸明氏、佐賀県知事香月熊雄氏から回答がありました。

質問一、「世界行動計画」や「国内行動計画」の趣旨にそって、「男は仕事、女は家庭」という固定的な役割分担意識を改め、女性の社会参加を促進するための政策を積極的にすすめるになりますか。

○青森県知事 すすめる。具体的内容—青森県の婦人行動計画を策定する準備を進めているが、同計画中に、（一）各種審議会委員、民生

委員の婦人の占める割合を高める。（二）消費生活運動を推進する。（三）交通安全運動活動を推進するなど社会参加の促進策について定める予定である。

○秋田県知事 すすめる。具体的内容—、五四年五月から婦人対策の総合調整の窓口を青少年課に設置した。二、婦人問題対策推進会議の設置を準備中である。

○山梨県知事 すすめる。目下そのための対策を婦人問題懇話会を作り進めている。

○佐賀県知事 すすめる。具体的内容—従来の社会慣習、及び県民意識等から早急な意識の改革は困難であるが婦人問題に関する県民の関心と理解を深めるための啓発事業を実施していく。（54年度「婦人の10年推進県民広場の開催を予定」）

質問二、男女平等教育を積極的にすすめますか。

○青森県知事 なんともしえない。理由—質問の趣旨がよくわからないが、教育の機会均等は学校教育推進のうえで最も重要なことであると考えている。

志熊氏は「学校教育の家庭科でどこまで家庭生活に関して教えられるか？ 本来は家庭でやるべきことではないか」「新指導要領の家庭科の女子のみ必修も家庭科の先生の大きなバックアップがあったから」「調査上、女子のみ必修賛成が少なくなってきたから、それで女子のみ必修をかえるパワーにならない。この現状分析がなければ女子のみ必修は動かせない」

志熊氏は、行政を変えるのは、現場の家庭科の先生たちの要望や批判の声であると再三語っている。しかし、文部省の基本姿勢は国内行動計画にも基づかなければならないはず。又、動かそう、という意識がなければダメ、それを、現場の先生、のせいばかりにするのはおかしい。

話し合いの中で志熊氏が「父兄」という言葉を使っていると気がになった。

おわび

夏号で人権規約についておしらせしましたが、正しい名称は「国際人権規約」です。「世界」と書いたのは誤りでした。おわびして訂正させていただきます。

○秋田県知事 すすめる。方法—家庭教育学級や婦人学級等のいろいろな学習機会にこのことを学習するようにしている。今後を進める。婦人団体の方々と国内行動計画の学習を行っており今後も続け問題点を説明する。

○山梨県知事 すすめる。方法—婦人の民間有志を対象に各種指導者研修会を開催し、本問題をとり上げ研修している。

○佐賀県知事 すすめる。方法—婦人学級、勤労婦人講座等に役割分担意識の問題等を積極的に取上げるなど、社会教育面の充実を図りたい。

質問三、中学校の「技術・家庭」、高校の「家庭一般」の男女共修を積極的にすすめるになりますか。

○青森県知事 学習指導要領に基づいて、生徒や学校の実態に即してすすめるよう県教育委員会が指導している。

○秋田県知事 すすめない。理由—基本的には新教育課程の趣旨によって進めるのが適当と思う。具体的な教育課程の編成にあたっては、地域の実態や各学校の教育組織及び施設設備等の実態に応じ、更に生徒の進路や興味及び関心等の諸事情を充分に把握して検討すべきものと思う。

○山梨県知事 なんともしえない。理由—近

年家庭生活の重要性がさげばれているが、本県においては普通科指向が強く、いわゆる受験科目重視の風潮が強い。現在高校教育の中では、勤労体験学習の推進を各校で取り組み、実際的な生活学習も含めて検討している。現在男子生徒の中にわずかではあるが家庭科目選択の生徒がいるが、これからは、男子家庭一般選択者の受け入れについて指導内容等検討を進めていきたい。

○佐賀県知事 すすめない。理由―教育は本来、本人の特性、希望を尊重し、個性を伸ばすようにすべきであり、家庭教育のみを強調するのは適当ではない。

(中嶋里美)

都知事にまた質問

前号でお知らせしましたように、都教育庁指導部長に都での共修の具体的スケジュールについて質問したところ、とにかく指導要領に従うという主旨の回答がありましたので、これを受けてまた都知事あてに質問の手紙を出しました。

指導部長あての質問と部長の回答のコピー

を同封し、次の二つのことを読みました。

1. 知事は、この回答内容を東京都行動計画の精神にそったものとお考えになりますか。
2. 知事は、今後共修をすすめるために、どのような具体的な方法で、側面からの努力をなさいますか。

(選挙前、会から出した質問に対して、家庭科共修の問題については側面から努力するという回答がありましたから)

(梶谷典子)

山口県へ意見書

山口県行動計画に問題が多いことについては前号でお知らせしましたが、六月十二日に意見書を送り、問題点を指摘するとともに次のように要望しました。

「男女平等実現のために性別役割分担意識を払拭する教育の実現のため、(2)新しい時代に対応する学校教育の重点事項『家庭科教育のあり方』の中で、中学校の『技術・家庭科』、高校の『家庭一般』の男女共学を早期実現するように配慮していただきたい」

(梶谷典子・馬場洋子)

山形県の行動計画

情報をキャッチするのが遅れましたが、山形県は今年三月に行動計画を出していました。

「男女差別の解消」「役割分担の見直し」「男女平等教育の推進」がはっきりうたわれていますが、そのための施策となると新しさや具体性は乏しいようで、家庭科については次のように書かれています。

「……とくに中学校、高等学校家庭科の学習内容、方法などの検討をおこない、円滑な実施をめざし、男女平等教育を教育課程に位置づけるとともに、学習内容の確立をはかる」

(梶谷典子)

婦人問題を考える 埼玉のつどいより

五月十七日、埼玉会館で「婦人の地位向上に関する埼玉県試案」をめぐって意見交換がなされた。男女共修を実現するための具体策について質問したが、それらについては今後教育委員会との話し合いによって決定していくとのこと。九月に埼玉の行動計画が出来上がる。

(中嶋里美)

神奈川県では

～皆川鎮枝さんのおたよりから～

神奈川県では、私の属しております世界行動計画神奈川県学習会と、神奈川県県民部、県民総務室婦人班とが共同で神奈川県の行動計画を作成しようという動きがあります。しかし、民間婦人団体と行政とが手を結んで……ということとは、言うに易く、このくらい実行困難なことはいないように思われます。

～県の調査から～

昨年9～10月に実施された、20～69才の女性を対象とした神奈川県の調査では、次のような結果が出ました。

高校の家庭科は「男子も女子も同様に必修科目」にすべきだという回答が54・5%、「女子のみ必修科目」でよいとする人が31・9%。39才以下では男が男女必修、40才以上でも男女必修の方が女子のみ必修より多数でした。

(梶谷典子)

世田谷区の国への要望

東京都世田谷区では婦人対策協議会(代表委員谷野せつさん)が設けられ、婦人対策に関する報告が出されましたが、国に対する要望として次のように書かれています。

1. 学校教育の分野

(1) 学習指導要領の再検討

男女差別を温存するような内容の有無を点検するとともに、婦人問題を教育内容として取入れるように努力してほしい。

(2) 家庭科の改廃

中学校における男子用「技術科」女子用「家庭科」の別学、高等学校における女子のみ必修の家庭科は廃止すべきである。男女ともに民主的な家庭生活を担う者として必要な生活科学の理論と実技を共修するようにすることがのぞましい。

(以下略)

(梶谷典子)

皆さんの地域ではどんな状況ですか？
編集部ではおたよりをお待ちしています。

京都府立高校での

アンケート調査

京都府立高校家庭科研究会では、教育課程の五十七年度改訂を前に、四十八年度以来実施してきた男女共修家庭一般の成果と課題を明らかにし、その充実と定着をはかりたいと(1)全府立高校の履習生徒(一万人を越す)(2)他教科教師(3)家庭科教師を対象に調査を行った。その結果が送られてきたので、要点のみ紹介したい。

△共修賛成の生徒は▽ (以下数字は%)

	全日制	定時制昼	定時制夜
男子	五八・二	八一・八	六八・三
女子	九四・一	九一・七	九三・六

女子は圧倒的多数が共修支持。男子にはまだ努力が必要と研究会は述べている。理由の一位―家庭生活は、男女の協力によって成立するものだから二位―家庭生活についての知識や技術は男子も知っていた方がよい 三位―家庭生活を社会とのかかわりの中でとらえることは男女とも必要

〈共修反対の生徒は〉

理由の一位―家庭生活は、女子が責任を持つべきだから 二位―男は仕事、女は家庭という役割分担は当然だし、変わらない

〈他教科の教師は〉

共修賛成の理由の一位は生徒と同じで四九・四、二位―生活にかかわる諸問題は、男女共に責任を持つべき四八・八、三位は生徒の二位と同じで三八・四。反対では、女子教育の一環として大切九・三、家庭生活は女子が責任を持つべき四・〇

〈家庭科教師にとってのメリットは〉

共修実施によって生徒に対する認識が深まった七二、教育に対する視野が広がった六八で高率。教育全般に対しての発言がしやすくなった、教師としての自信が強まった、が同じで二四。この教師側のメリットは必ず教育の力量として、生徒に返せるだろう、と研究会では見ている。

共修反対者は固定的な性別役割分担にとらわれていることが、調査によく現れている。

(半田たつ子)

「男女共修生活科をすすめる会」がスタートしました

(名古屋) 奥村 和子

男は外、女は内という社会通念は、生活技術を持たない男と、生活費のない女を作りあげ、家族形態をとり、人に依存しなければ独立、自活した生活をできなくしています。

これは学校教育の中で、「男に必要なことは女にも必要だし、女に必要なことは男にも必要だ」ということが見落とされ、男女別学の技術・家庭科が罷り通っていることも大きな影響を及ぼしています。まして、小学校では一緒に学ぶのですから、中学高校とも共修でいいはずだ。

そこで六月二日発足した当会では、小学校から高校までの技術・家庭科の教科書を中心にあらひ直し作業を始めています。これを基にしながら、どうしたら人間らしく生きれるのかを考えて、一人でも生きれるための生活科設置をすすめようとしています。

なお、会の名称を家庭科共修としなかった理由は

①今の技術・家庭科は、やらなくてもいいことをやらせたり、必要なことが抜けていたり

でかなり手直しがいると思われる。
②どちらの名をとっても、一方の教師の不安が拭えない。

③家庭という名は、過去のよろもろの悪いイメージをも背負っている。

④家庭というからには、親(父母)子の生活のみが考えられる。そうでなく、まず一人でも自立して生きていける教育を目ざしたい。の四点からです。

家庭科共修をすすめる会と名称は異なりますが、目ざすところは同じだろうと思いますので、いろいろ教えていただきながら、又、共闘できる場所では一緒にやってゆきたいと考えています。

※例 会―偶数月の第一土曜日

学習会―毎月第一、三土曜日(原則として)

会 費―年一二〇〇円

連絡人―奥村和子、石川由紀

(代表はあえて置きません。あくまでも連絡人、連絡先です。)

教科書会社に申し入れ

―共学に使える

家庭科教科書を―

駒野 陽子

男子の選択も認める高校の家庭科指導要領にのっとって、教科書会社は現在、来年、五月の検定をめざして、新しい教科書を編集集中である。そこで、私たちは、高校の「家庭一般」の教科書を出版している各社に、時代の流れに即した、性別役割にとられないよい家庭科教科書をつくるよう申し入れを行うことにした。

現行の「家庭一般」の問題点については、すでに出版労連を通じて話し合いをしており、また、会社に具体的に問題点を指摘した文書を送ってあるが、文部省から新指導要領の解説書が出された今、再び、教科書会社に私たちの要望を伝え、少しでも新教科書に反映させたい、と思っている。

七月三十一日、まず、実教出版を訪問した。会社側からは、編集部第四課本郷充課長をはじめ、直接家庭科教科書の編集にあたっている四名。

「新教育課程でも、女子の必修科目として家庭科が位置づけられているので、文部省の検定を考えれば、積極的に共修むけの教科書を作、という方針は出しにくい。現場の先生方の意向を尊重すれば、大きな方向転換はできないと思うが、以前に皆さんの会から出された具体的な問題点については、十分留意したい」との本郷課長からの前提が示されたあと、話し合いにはいった。

指導要領は、大綱を示したのみで、具体性が少ないので、解説書がかなり参考にされる、と思うが、解説書は、従来のものとあまり変化のない女子向きのものだが、それに拘束されないでほしい、という要望に対して、「文部省からも、拘束性のあるのは指導要領のみ。解説書は参考にする程度でよい、との意向が示されている。しかし、家庭科は、たてまえはともかく、一般的に女子向きのものという従来のイメージがあるから(本郷氏の個人的見解)、現場の先生の意識を考えて、作らざるを得ない」との回答。

家庭運営について、女子が運営の責任者である、という立場をとらないように、との要望については、「特に女子ということ強調するつもりはない。従来のように衣食住中心の観点からでなく、総合的な眼で家庭運営を

考える」。

「女は家庭に」という意識は、少数派になってきている現在、また現実主婦労働者が激増して家庭の形が変ってきているという時代の動きに注目して、時代おくれにならない教科書を作、という要望に対しては、「教科書が使用される段階には現実とずれている、ということではなくしたいが、見通しを立てることはとてもむずかしい。現場の先生の意識の変化を調査しながら、すすめていく」。

調査・統計・資料などをたくさんおせて、「考えるきっかけを与える教科書に」という私たちの考え方には「基本的に賛成である」とのこと。

更に、「ホーム・プロジェクト、家庭クラブの扱いについて」「女の労働権の切りすてにならない家庭科に」「生活を守るという考え方を育てる家庭科に」など、私たちの主張をいろいろ伝えてきた。すでに「執筆者は、従来の方々が中心で一部、新しい人を補充。編集の基本姿勢を提示し、原稿も仕上がった部分もある」という段階だそうだ。

あと、八・九月中に一橋書房、教育図書、東京書籍などの話し合いをする予定である。

高校学習指導要領解説 (家庭編) について

和田 典子

△はじめに▽

文部省は、さる五月末表題の著作を実教出版から発行しました。編集主任は小笠原ゆ里視学官、作成協力者は現場教師11名、研究者及び大学教官11名、指導主事2名、学校長2名合計26名という顔ぶれです。

わたしたちは、既に告示された高校学習指導要領が「男子が履修する場合は、その内容を検討すること」と記しながら、男子が履修するための編成については全く示さず、一方では「女子必修」の線を固守していることに對して強い不満を表明してきました。また、「女子必修」の枠づけとはうらはらに「家庭一般」の内容がわずか6項目の大綱を示しているに過ぎず、しかもその内容項目として、「ホームプロジェクト・家庭クラブ」が据えられていることについても疑問をいだいてきました。

必修一四〇時間の内容が、わずか6項目で

は教科書をどう編集したらよいかさえ見当も

つかないではないかという質問に對して、小笠原視学官の回答は「くわしくは解説をみてほしい」でしたから「解説」に對するわたしたちの関心は、從來になく高いものでした。

解説は、改訂家庭科に對してわたしたちがいだいてきた疑問が、杞憂でないことを明らかにしています。ここではそのなかから特筆すべき点に限って指摘することにします。

△主要な問題点▽

① 別学共修が基本方針と解されること。

「改訂の趣旨」のなかで「男子が選択履修する場合」の部分に「男子と女子の学習してゐる内容についてはかなりの相違があるので、男子が『家庭一般』を履修する場合には、その学習経験をふまえた適切な指導が必要である」としているほか、内容をみても「日常着の製作」の(4)では「実習題材としてはワンピースドレス、ジャンパースカートなどが考えられる」として、全く女子むきの題材を示しています。

そのほか、教科の目標は現行と同様「家庭生活を経営する立場から」の前提をいささかも変更せず「強化した保育領域」でも「将来親となるものの自覚と自らの健康を管理する実践的態度を育てること」を「母性の健康」

の目標としてかけています。

しかし、中学校での履修領域は、男女による差だけではなく、学校差もきわめて大きいわけですから「家庭一般」の指導上の配慮は性別に限るものではないわけで、男子の履修を認める以上、女子向きの現行内容をそのまま引きつぐものであつてはならないはず。わたしたちは、別学共修の前進面を發展させると同時に、内容の「女子向き」色彩を一掃し、男女ともに学ぶ国民的教養としての「家庭一般」の自主編成にとりくまねばなりません。

② 福祉政策、青少年対策の家庭科への持ちこみがみられること。

女子必修「家庭一般」の内容に位置づいたホームプロジェクト・家庭クラブについて、解説は「個々の家庭や地域の家庭の問題点を解決、充実に向上させる実践活動を行なわせること」を内容として示しています。またその活動は、自主的、奉仕的、研究的に行なわせると述べていますが、自主的、研究的のほかに「奉仕的」とあることを見逃すことができません。折しも政府は家庭づくり、地域づくりに、青少年や婦人のボランティア活動を大幅に導入しようとしているからです。

すこしよくなった

小学校教科書

八島 紀子

現在、小学校の教科書は、開隆堂と東京書籍の二社から発行されています。

先日、新しい教科書の展示会がありましたので、会で申し入れをした「性による差別がなく、男女相互の敬愛と協力の必要が記されているか。写真、さし絵等にかたよりのないか。」ということを中心に新しくなったところを紹介いたします。

開隆堂の教科書

開隆堂発行の教科書から見えてきますと、五年生の家庭領域の扱いが新しくなっています。現在の教科書では、「家族とその役割」に出ている生活調べにおいて、父親は忙しく家族と団らんができず、家庭の仕事に協力できないことを暗に認めていました。したがって、母親が家庭の仕事をするのは当然とする

考えが出ていました。新しい教科書では、生活調べが削除されています。そのかわり、家庭の仕事の分担例が載っており、父の働いている家庭、父母が働いている家庭が例にあり、母が働いている家庭のことを考えさせています。今までのようにひとつの型の家庭ではなく、様々の家庭のあることを子どもたちに理解させることができ、いいと思います。さし絵には、父親が小さな子どもを抱えている場面や、母親が仕事に出かける場面も登場してきています。

又、六年生の家族の生活時間の例においても、専業主婦の例ではなく、働く母親の例にかわっています。アンケートでも約七〇%の母親が何らかの形で働いているのですから、働く母親の例は適切だと考えます。ただ、父親の生活時間に変化がないことについては、もう少し家事を分担すべきではないかと思えます。

被服領域においては、六年生の「衣生活のくふう」で、さし絵に男の子の登場が目立っています。手で洗たくをしたり、ほころびを直したり、電気せんたく機を操作しています。それと、ある一日の衣生活の例では、男の子も女の子も同じように描かれているので、児童が自分の生活と照らし合わせて、衣生活を

くふうすることができると思います。

東京書籍の教科書

次に、東京書籍の教科書を見てみます。父親がおそうじをしたり、写真は、どちらかというと男の子の登場が目立っております。又、子どもたちが積極的に家庭科にとり組めるように、「エプロンやカバーの製作」においては、形と大きさを決める順序が児童にわかりやすく図で示されています。

住居のところでは、開隆堂ではほとんど目立たなかった生活環境問題について、写真入りで取り扱っています。車公害、河川の汚染、騒音など、現実児童が体験していることを扱っているのは、とても有意義だと思います。五年生の「気持ちよいすまい」においても、ごみ処理の過程がさし絵によってわかりやすく載っており、実際の生活に即、照らし合わせて考えられるよう構成されています。

以上が、私が展示会で見た感想です。教科書だけで教えるわけではありませんが、子どもは教科書の影響を多大に受けます。少しでも気がついたら、教科書会社に問い合わせることが必要だと思いました。

いろいろな集 会 から

世話人は、教育関係、婦人関係の集會に出席して、家庭科共修に向けてのアピールを続けています。

第24回はたらく婦人の中央集會

総 評 系

〈学校教育分科会〉

五月二七日、オリンピック記念青少年総合センターで開催された分科会へ学校教育の問題に出席した。開始前は、会場前でプラカードを持ち、家庭科の男女共学をアピール、小学生の男の子が「家庭科だ！」と言って通り過ぎた。

助言者は芝浦工大教授井蓋猛氏。教科書の中の男女差別、男の先生、女の先生」に対する親側からの差別、女だけの家庭がいかに不自然な子供たちを創りあげているか、会場から問題提起された。京都、大阪の家庭科男女共学の実践報告に続き、他教科の先生たちが家庭科の男女共学を働きかけているという

都立高校からの報告。又、行進曲に軍歌が使われているという栃木県の報告に参加者一同あ然とさせられた。

(馬場洋子)

〈家庭教育分科会〉

全国から集まった母親たちの熱い話し合いでした。中味は、共働きの不安。例えば「子どもとの接触をどのようにしていくか」や、学童保育、最近問題になっている子どもの自殺、塾についての様々の意見が出されました。特に、自殺については、勉強についていけない子が自分の存在を失い命を絶つのではないか。教育の中で差別、選別が行なわれ、子どもが自由に自分のやりたいことができない状況ではないか。そして、今、多くの親たちが考えている「勉強さえしていればいい」という考えを捨てよう。遊ぶ時間を確保しよう。男だから、女だからで行動を制限せず、子どもたちになるべく、多くの体験をさせたいという声がほとんどでした。(八島紀子)

婦 団 連 系

六月十六、十七日、東京・神奈川で中央集

會が開かれた。

教育および女子教育の分科会がなかったため、「政治反動と婦人の権利」分科会の「共働きと家事」のところに参加した。この分科会に参加した人は四十人程度で、うち、男性二人。

話題は、職場での母性保護の権利と労基研報告の問題、民主的な家庭作りの経験談が多く出された。さらに、広田寿子助言者より、これからは学校教育の家庭科の男女共修をすすめていく必要があるのではないかと提言もあった。民主的な家庭作り、民主的な職場作りに情熱を持って話された人たちと見えたが、家庭科への関心が薄いのか、アピールも行ったが、話題とはならなかった。

(青山和世)

母 親 大 会

第二十五回日本母親大会が七月二十八・二十九日に東京で行われた。その中の「子どものもんだい、教育のもんだい」第二会場の13分科会「女子教育のもんだい」に参加した。ここでは、用意された二十ばかりの机と椅子だけでは足りず、教室の床がみえなくなるほど坐りこんだ人でいっぱいになった。女性の

自立、労基法改正の問題等出される中で、長野の教師から「やはり、学校教育の中で家庭一般の女子必修に甘んじず、男女共修にしていかなければならないのだが、肝心の家庭科の先生に反対の立場をとられる」とか、家庭科教師から「家庭科の教師の意識が低いと言われることが多い家庭科教師ももちろんだが、学校全体のバックアップも必要だ」などの意見が出された。

(青山和世)

第14回

家教連夏季集會

さる7月25・26・27日、国立婦人教育會館(埼玉、嵐山)で開かれたことしの大会には、全国各地から三百名の参加があり、子どもの人権と家庭科教育をテーマに、多彩な研究、討議がすすめられました。

集會第一日目の基礎講座の一つに設けられた「技術・家庭科の男女共学をどうすすめるか」の講師は半田たつ子さんが担当し、すすめる会のピンクパンフや各種資料などをテキストに、共学の基本問題や実践の方法などについて話し、参加者を励ましました。

第二日目の中学校分科会では、埼玉から上尾市9校と与野西中の実践及び滋賀・八日市、

世話人会報告

(六月九日)

- 一、七月七日の集會、経過報告の内容、及び役割分担について決める。
- 二、小学生へのアンケートの集計のしかたについて決める。
- 三、秋の集會のテーマ、内容について検討。
- 四、山口県行動計画に対する意見書の内容を検討。

五、東京都の行動計画に関する質問に回答来るも、共修の方向についてふれていず、再度知事宛に質問状発送。

六、自治体(青森、秋田、山梨)からアンケート回答あり。

(七月七日)

- 一、小学生アンケート結果をマスコミ宛発送。
- 二、九月の授業参観の段どり。

共学を前提とした教育内容の研究・実践がさらにすすみ、小・中・高を通しての共学家庭科(国民的基礎教養としての)の全体構想の試案がまとめ上げられたことは、特筆すべき前進面でした。

(和田典子)

- 三、文部省との話し合いが予定より遅れたが、何とかすすめたこと。
- 四、教科書会社との話し合いの段どり。

五、いろいろな集會でのアピールの段どり。

六、全員にはがきアンケートを送ること。

(八月四日)

- 一、佐賀県知事からのアンケート回答の報告。
- 二、京都で共修後退の恐れがあること。
- 三、中学での共学が三倍にふえていること。
- 四、会報の印刷所が変ること。
- 五、九月十八日(都立農産高校授業参観のため)案内ビラ作成の段どり。
- 六、次回の集會のテーマ、日時について。
- 七、会員へのアンケートの項目について。
- 八、自民党「家庭基盤充実に関する特別委員会」へ話し合いの申し入れをすること。
- 九、家庭一般の指導書について質問を出すこと。

(梶谷典子・中嶋里美)

自民党の 家庭基盤充実対策

梶谷 典子

六月十二日、自由民主党政務調査会、家庭基盤の充実に関する特別委員会から「家庭基盤の充実に関する対策要綱」が発表されました。大平首相のかねてからの主張にそうものですが、問題の多い内容です。

基本的考え方として、「国家社会の中核的組織として家庭を位置づけ」「国家と地方自治体および職域と家庭との『役割分担』を明確にし」「老親の扶養と子供の保育と躾けは、第一義的には家庭の責務である」と述べ、問題解決をすべて家庭の責任にしようという意向を見せています。時節柄「女は家庭に」と露骨には書いてないものの、真意はそちらにあるのかも知れません。

重点施策としてあげられているもののうち目立つものを拾うと、「『家庭の日』の新設」「テレビの深夜放送の自粛」「持家取得の促進」「妻の遺族年金の充実」「老親扶養者への優遇措置」「育児休業制度の拡大」などがあります。特におかしいのは、貯蓄率保険加入率の高さ、家族主義的な企業内労働組合、

老親と子供世帯の同居率の高さなどの「国民的特質を維持発展せしめながら、日本の福祉社会を実現し、家庭基盤の充実をはかって行かなければならない」という主張で、要するに社会保障に対する消極的姿勢を示したものと云えましょう。

重点施策の中に「小・中・高校に於ける家庭科教育の充実強化」も入っていて、次のように述べられています。

「国民の一部にある学校に於ける家庭科教育（特に男児に対する）軽視の意見にわれわれは賛成できない。しかしわれわれは家庭科教育の充実即ち技術（料理、裁縫等）偏重に陥らず、家庭の意義についての自覚を深める教育内容の深化について検討を行ない、男女の別を問わず将来の家庭人としての基礎的教養を身につけるよう、家庭科教育の刷新、強化につとめなければならない」

どんな「教育内容」を考えるのが問題ではありますが、家庭科の男女共修の必要性は保守革新の別なく認められて来たと言えます。文部省はいつまで抵抗するつもりなのでしょう。

なお、学識経験者による「家庭基盤充実研究グループ」の方は、結論がまとまるのはまだまだ先のようです。

総理府では

◎婦人問題担当室長赤松良子さんは国連公使に。新しい室長は高橋久子さん（前労働省婦人労働課長）です。

◎婦人問題企画推進会議の提案で、現状改善委員会ができ、教育の問題のうち特に家庭科、教科書、大学の現状について検討するそうです。

アンケートにご協力ください

会報、会費、運動のすすめ方について会員の皆さまのご意見を伺い、各地域の状況を知るためにアンケートのはがきをつくりました。おいそがしいと思いますが、必ずご回答ください。さいますようお願いいたします。はがきは九月中にお送りください。

次の集会について

樋口恵子さんが海外旅行をされましたので各国の女性と家庭科について話していただきます。一月十九日出の予定です。

（編集部）